

スキー・雪遊び体験を通した
知的障害児の支援に関する研究

霜 触 智 紀・木 山 慶 子・中 雄 勇 人
小 山 啓 太・田 井 健太郎・島 孟 留
霜 田 浩 信

**A Study on Support for Mentally Retarded Children Through
Skiing and Playing with Snow Experiences**

Tomonori SHIMOFURE, Keiko KIYAMA, Hayato NAKAO,
Keita KOYAMA, Kentaro TAI, Takeru SHIMA
and Hironobu SHIMODA

スキー・雪遊び体験を通じた 知的障害児の支援に関する研究

霜 触 智 紀¹⁾・木 山 慶 子²⁾・中 雄 勇 人²⁾
小 山 啓 太²⁾・田 井 健 太 郎²⁾・島 孟 留²⁾
霜 田 浩 信³⁾

1) 宇都宮共和大学子ども生活学部

2) 群馬大学共同教育学部保健体育講座

3) 群馬大学共同教育学部特別支援教育講座

(2022年9月28日受理)

A Study on Support for Mentally Retarded Children Through Skiing and Playing with Snow Experiences

Tomonori SHIMOFURE¹⁾, Keiko KIYAMA²⁾, Hayato NAKAO²⁾,
Keita KOYAMA²⁾, Kentaro TAI²⁾, Takeru SHIMA²⁾
and Hironobu SHIMODA³⁾

1) Faculty of Child Studies, Utsunomiya Kyowa University

2) Department of Health and Physical Education, Cooperative Faculty of Education, Gunma University

3) Department of Special Needs Education, Cooperative Faculty of Education, Gunma University

(Accepted on September 28th, 2022)

I. 緒 言

近年、知的障害のある子どもたち（以下、「知的障害児」と略す）が運動・スポーツを行うことのポジティブな効果が期待されている。先行研究では、「知的障害児（者）がスポーツ・レクリエーション活動を積極的に実施することは、生活の質（QOL）の向上に総体的に寄与する」¹⁾可能性が示唆されており、知的障害児のスポーツ活動を推進していくための支援策を講じていく必要がある。こうした支援の一つに、「知的障害のある人たちに様々なスポーツトレーニングとその成果の発表の場である競技会

を、年間を通じ提供している国際的なスポーツ組織]として、スペシャルオリンピックスがある。スペシャルオリンピックス参加者の保護者を対象とした田引²⁾によると、「当事者（保護者）側にとってのスポーツニーズは、ルールに基づいた競技や記録、勝ち負けというよりもスポーツ参加そのものにある」ことが指摘されている。よって、まずは知的障害児が学齢期においてスポーツの楽しさに気付くことのできるよう支援することが必要であり、そのため個々人のニーズに応える環境を整える、すなわちスポーツ参加の機会を作ることは、障害者スポーツ推進の支援策となり得る。以上のことから、知的障害児が継

続的にスポーツを行うことができるよう、まずはスポーツの楽しさを味わうことのできる機会を充実させることが求められる。

ここで、知的障害者が取り組むことのできるスポーツについて、全国障害者スポーツ大会にて行われる知的障害者対象の競技種目をみると、個人競技として陸上競技、水泳、卓球、フライングディスク、ボウリング、団体競技としてフットソフトボール、バレーボール、バスケットボール、ソフトボール、サッカーがある³⁾。この大会にて行われる競技は、全国共通の障害者のスポーツプログラムとして、地域における障害者スポーツの推進のために大きな役割を担っている⁴⁾。

上記種目に代表される他、知的障害者が取り組むことのできる運動・スポーツは複数種目存在し、知的障害者に対するスポーツ活動支援の効果が期待されるが、近年こうしたスポーツ活動に関連し、野外活動といった身体活動を伴う自然での活動によるポジティブな効果も期待されている。知的障害のある生徒に自然体験活動（ウォールアート、キャンプファイヤー等）を取り入れた生活単元学習の学びのプロセスについて検討した中丸ほか⁵⁾は、「教師からみた知的障害のある生徒は、【体験の少なさ】が根底に存在し、活動の直接体験により【活動に対する興味関心と恐怖心】を持ち、【実感を伴う理解】という学びを得ることができた。その結果、【感情の変化】とともに、【意欲と行動の変化】が起きた」ことを報告している。その他、知的障害者を対象に里山を利用した山仕事等の自然利用プログラムを実施した中村ほか⁶⁾や、国内外の3つの知的障害者施設における野外活動の療育事例から知的障害者の野外活動の意義について考察した上原⁷⁾の報告からも、知的障害者の野外活動は、学びや心身の健康状態にポジティブな効果をもたらす可能性があると考えられる。しかしながら、知的障害者、特に知的障害児を対象に野外で行われるスポーツ活動及び自然体験活動に着目した実践報告は依然として少ないのが現状である。

そこで本研究では、知的障害児を対象としたスポーツ体験プロジェクトを立案し、野外スポーツ活

動の支援実践を試み、その実践について報告する。その際、本研究では保護者の視点と支援者の視点から本プロジェクトを評価し、今後継続していく上で効果的な支援を行うための基礎知見を得ることを目的とする。実際の指導及び関わりを体験した支援者から得たデータは、今後の効果的な支援を検討する上で貴重な資料になり得ると考えられる。

II. 方法

1. スポーツ体験プロジェクトにおける支援プログラムの概要

本研究にて報告するプログラムは、「令和3年度群馬大学地域貢献事業障害のある子どもたちのスポーツ体験プロジェクト」として行われたはじめての試みである。本プロジェクト全体の流れを表1に示す。本プロジェクトの事業概要及び趣旨は、地域貢献事業として群馬県内のスキー場において、障害児を対象としたスキー・雪遊び教室を実施するものである。長引くコロナ禍により、特に障害のある子どもたちの活動は大きく制限され、体力の低下や対面での人とのつながりが希薄になったことによる心の問題が危惧されている。コロナ禍により、障害のある子どもたちの学びの場が直面した状況について、「学校が休校となり授業、活動が制限され、福祉サービスの利用も制限されたことから、本人、家族とも心身に影響が及んだ。学校、福祉事業者等が連携しながら支えるための体制が必要⁸⁾」である。そこで、子どもたちが自然の中で仲間や支援者とともにスキーや雪遊びを体験する活動は、運動・スポーツや友人と交流することの楽しさ、喜びを味わいながら、体力を向上させ、健やかな心身の育成を促すことが期待される。さらに、群馬県は地域的な特色として山々に囲まれており、自然豊かな風土から多数のスキー場が運営されている。そこで身近にある自然、とりわけ今回は雪山でのスキー・雪遊びを通して、地域性を活かした障害児の支援を行うことを目的としている。加えて、支援者が障害児と活動することを通して、支援の方法を学ぶことも目的としている。スキー・雪遊びといった活動は、板を履くことや寒

い環境下であること等、普段と環境が大きく異なるため、支援者の支援スキルも高める必要がある。

活動内容は、スキー・雪遊び（そり、雪合戦、雪だるまづくり等）である。なお、スキーは、参加者の経験及びレベルに合わせて3グループを編成し、参加者に応じた支援ができるよう配慮した。本プロジェクトは、2022年1月22日・2月26日の2日間にて実施した。当日のスキー・雪遊び教室の流れを表2に示す。

2. 対象と手続き

本プロジェクトの参加者は、群馬県内の特別支援学級や特別支援学校（知的障害）に在籍する児童・生徒12名（小学校3年～中学校3年の男子10名、女子2名）であった。参加者一覧を表3に示す。支援者は、群馬大学教職員7名、群馬大学共同教育学部に所属する学生12名（保健体育専攻生9名、特別支援教育専攻3名）であった。

本研究の対象者は、支援者の学生12名（以下、「支援学生」と略す）と参加児童・生徒の保護者9名（以下、「保護者」と略す）である。支援学生にはインター

表1 プロジェクト全体の流れ

日 程	内 容	場 所	調査計画
2021年11月26日	スタッフ・支援者 打ち合わせ	群馬大学 荒牧キャンパス	—
2021年12月25日	参加者向け事前説明会 (顔合わせ, 概要説明, ブーツ合わせ等)	群馬大学 荒牧キャンパス	支援者事前調査 保護者事前調査
2022年1月14日	スタッフ・支援者 事前練習会	軽井沢スノーパーク	—
2022年1月22日	スキー・雪遊び教室①	軽井沢スノーパーク	—
2022年2月26日	スキー・雪遊び教室②	軽井沢スノーパーク	支援者事後調査 保護者事後調査

表2 スキー・雪遊び教室①②の流れ

日 程	内 容	場 所
2022年1月22日 2022年2月26日	11:40	学生集合
	12:00	参加者集合, 受付, 準備
	12:20	各グループによる活動①
	14:00	休憩・軽食
	14:30	各グループによる活動②
	15:30	活動終了
	16:00	振り返り, 片付け, 解散

※全体として示したタイムテーブルであり、各グループごとに活動と休憩の時間は多少異なっていた。

表3 スキー・雪遊び教室参加者について

参加者	学年	性別	グループ	雪遊びの経験 ¹⁾	スキーの経験 ²⁾	参加日程		
						2021年12月25日	2022年1月22日	2022年2月26日
1	小学3年生	男子	スキーC	あり	あり	○	○	○
2	小学4年生	男子	スキーB	あり	あり	○	○	○
3	小学4年生	女子	雪遊び	あり	なし	○	○	○
4	小学5年生	男子	雪遊び	あり	なし	○	○	
5	小学6年生	男子	スキーC	あり	なし	○	○	○
6	小学6年生	男子	雪遊び	なし	なし	○	○	○
7	中学1年生	男子	スキーA	あり	あり	○	○	○
8	中学1年生	女子	スキーA	あり	あり	○	○	○
9	中学3年生	男子	スキーA	あり	あり	○	○	○
10	中学3年生	男子	スキーB	あり	あり	○	○	○
11	中学3年生	男子	スキーC	あり	なし		○	○
12	中学3年生	男子	雪遊び	あり	あり	○	○	○

1) 「保育園の時、そりを少し」「庭で遊んだくらい」との回答は「あり」とした。

2) 「板を履いて歩く」程度の行為は経験ありとした。

ネットツールによるアンケート調査を、保護者には紙面調査を、それぞれスキー・雪遊び教室の前後の計2回実施した。

倫理的配慮として、回答は任意であること、データ処理において個人を特定しないこと、利益・不利益は生じないことを書面及び口頭で説明し、回答をもってその同意とした。

3. 調査内容

3.1 支援学生に対する調査

3.1.1 知的障害者に対する日常場面での意識・態度

支援学生に対する調査内容は、松本・田引⁹⁾の研究で用いられた「知的障がい者に対する日常場面での意識・態度」を測定する18項目を用いた。これらの構造は、具体的な関わり態度を表す8項目から構成される「実践態度」、知的障害者の社会的な位置付けに関する6項目から構成される「社会的受容」、明らかに否定的な印象を持った4項目から構

成される「否定的印象」の3因子18項目である。回答は、松本・田引⁹⁾に基づき、「まったくあてはまらない(1点)」～「非常にあてはまる(5点)」の5件法にて、各因子に対応した項目得点を平均し、下位尺度得点を算出するとともに、最小値、25%タイル値、中央値、75%タイル値、最大値を算出した。

3.1.2 自由記述

事前調査では「今回のプロジェクトでは、どんな経験を積みたいですか」を設定し、自由記述を求めた。事後調査では、大山¹⁰⁾の先行研究で使用された「振り返りシート」の6項目(「プログラム前の様子〈体調・気分、ブーツ・ウェアなどを自分で準備していたかなど〉」「体操の様子〈伸ばすところをしっかりと伸ばせているか、どのようなサポートが必要かなど〉」「プログラム中〈プログラム中に気づいたことをお書きください〉」「休憩中〈休憩中に気づいたことをお書きください〉」「プログラム中②〈プログラム中に気づいたことをお書きください〉」「その他、気づいたこと〈自由にお書きください〉」)を

表4 支援学生のスキー・雪遊び教室前後の知的障害者に対する意識・態度得点の比較

		平均値	最小値	25%タイル値	中央値	75%タイル値	最大値	p 値
実践態度	教室前	4.6	4.0	4.3	4.6	5.0	5.0	0.596
	教室後	4.5	4.0	4.1	4.5	5.0	5.0	
社会的受容	教室前	4.4	3.0	4.1	4.6	4.7	5.0	0.474
	教室後	4.5	3.0	4.1	4.7	4.8	5.0	
否定的印象	教室前	2.5	1.0	1.6	2.3	2.8	5.0	0.020
	教室後	1.9	1.0	1.3	1.9	2.4	4.0	

N = 12

Wilcoxon の符号付き順位検定

参考に、自由記述を求めた。

3.2 保護者に対する調査

本プロジェクトに参加した児童・生徒の保護者に、事前調査では本プロジェクトに期待することについて、事後調査では本プロジェクト内やその後における自身の子どもの様子について、自由記述の回答を求めた。なお、いずれの回答も児童・生徒の母親から得られたものであった。

4. 解析方法

支援学生を対象として調査した「知的障がい者に対する日常場面での意識・態度」の得点の解析については、正規性の検定を実施した後、実施前後の得点を Wilcoxon の符号付き順位検定にて比較した。統計処理ソフトは、IBM SPSS Statistics Ver.27 を用い、有意水準は 5%未満とした。

支援学生及び保護者を対象として調査した自由記述については、テキストマイニングを実施し、単語の出現傾向を探った。

Ⅲ. 結果

1. 支援学生に対する調査

1.1 知的障害者に対する日常場面での意識・態度の認知の変容について

表4に、支援学生のスキー・雪遊び教室前後の知的障害者に対する意識・態度得点の比較結果を示す。

分析した結果、「否定的印象」の因子において、教室前に比較し教室後の尺度得点が有意に低かった ($p < 0.05$)。

1.2 自由記述の分析

支援学生の自由記述についてテキストマイニングにより分析した結果を図1に示す。事前調査では、「知的障害」「指導法」「児童生徒」「関わる」「学ぶ」等の単語が主に抽出された。事後調査では、「スキー」「様子」「子ども」「履く」「滑る」等の単語が主に抽出された。

2. 保護者に対する調査

保護者の自由記述についてテキストマイニングにより分析した結果を図2に示す。事前調査では、「ドキドキワクワク」「臆する」「有りがたい」「取り組める」「やり遂げる」「信頼関係」等の単語が主に抽出された。事後調査では、「スキー」「ソリ」「ささえる」「滑る」「体験」「貴重」等の単語が主に抽出された。

Ⅳ. 考察

本研究は、「令和3年度群馬大学地域貢献事業障害のある子どもたちのスポーツ体験プロジェクト」として、知的障害児を対象にスキー・雪遊び教室を開催した。支援学生の意識変容と保護者からみられた子どもの姿に着目し、今後のよりよい支援のあり方を

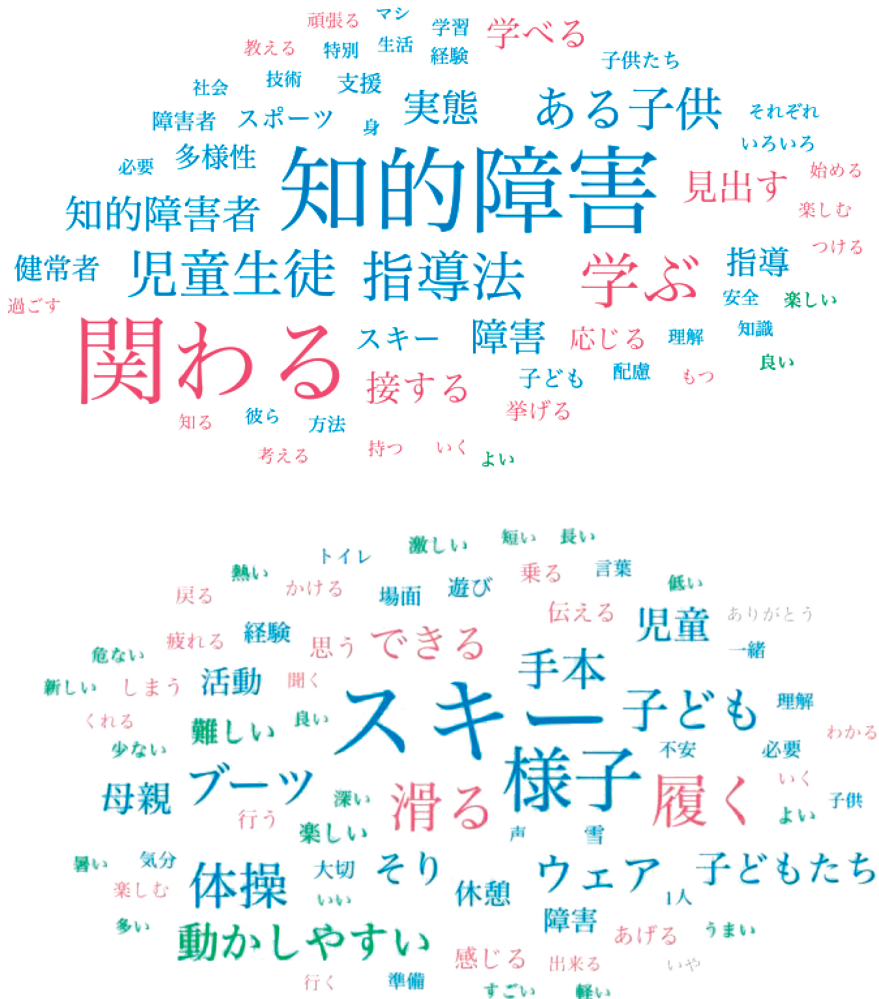


図1 支援学生の自由記述分析
(上が事前, 下が事後調査)

探るものである。

1. 支援学生に対する調査からみたプロジェクトの意義と課題

1.1 プロジェクトの経験による知的障害者に対する日常場面での意識・態度の変容

支援学生の知的障害者に対する日常場面での意識・態度の結果から、支援学生はスキー・雪遊び教室を通して、知的障害者に対する「否定的印象」の認知が低くなる結果が示された。「否定的印象」を構成する項目は、「知的障害のための福祉は、もっ

と生活にゆとりができてから考えるべきである」、
「知的障害のある人のことは親が責任をもてばよい」、
「知的障害のある人は施設で生活するほうがよい」、
「多くの知的障害者は、暴れたり物をこわしたりする乱暴な行動をする」⁹⁾であり、一般的に知的障害者に対して明らかにネガティブな印象を持つ場合に得点が高くなることが考えられる。したがって、支援学生は教室での知的障害児とのスキー・雪遊びでの関わりを通して、知的障害者に対する「否定的印象」の認知が、ポジティブなものに変容したと考えられる。松本・田引⁹⁾では、この「否定的印象」の

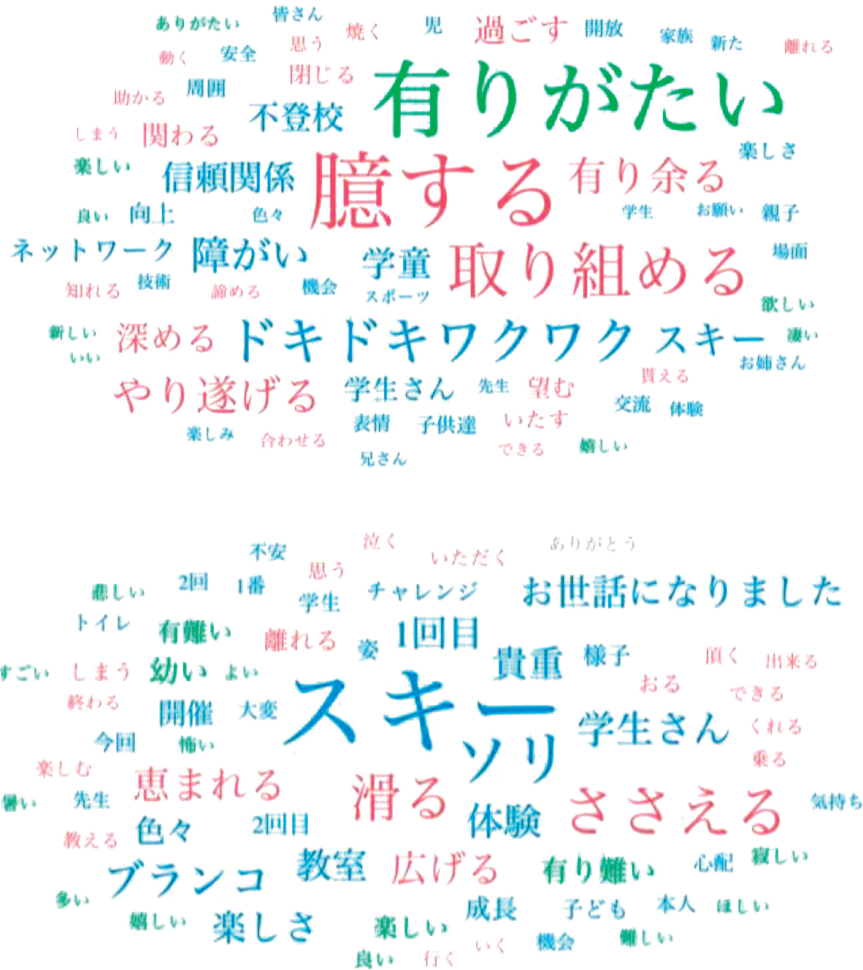


図2 保護者の自由記述分析
(上が事前、下が事後調査)

認知には、知的障害者に対するイメージとして「親和性」をもつことが関連し、身近で親しみやすく話しやすいイメージをもっているほどその印象は肯定的になることが示唆されている。すなわち、支援学生は支援活動を通して、支援前のイメージよりも知的障害者は身近で親しみやすく話しやすいと認知が変容したことから、「否定的印象」の得点が低下した可能性が示唆された。

1.2 自由記述の分析

支援学生の自由記述についてテキストマイニングにより分析した結果、事前調査では、「知的障害」「児

童生徒」「関わる」「指導法」「学ぶ」等の単語が主に抽出された。この結果から、教室前の支援学生は、知的障害児への支援を通して、スキーや雪遊びの指導方法について理解を深めたいと考える傾向にあることが推察された。この傾向は、支援学生はいずれの学生も教育学部に所属しており、将来の自分自身のキャリアのために学びたいという意思の表れであるとも考えられる。一方、事後調査は、「スキー」「様子」「ブーツ」「子ども」「ウェア」「履く」「滑る」等の単語が主に抽出され、より具体的な行動に関する記述の傾向がみられた。この結果から、教室後の

支援学生は、事前調査にて課題にした指導方法について、具体的な場面を経験しつつ、反省することができたものと推察される。また、先行研究では、「振り返りシートを作成すること自体が、自身の指導方法や選手の状態について明確化するためのトレーニングとなっている可能性」¹⁰⁾と述べられている。したがって、支援者の支援方法や、支援する知的障害児の心身の状態の把握等のための振り返りの機会を設けることで、参加児童・生徒に対してより効果的な支援ができるようになるものと考えられる。

2. 保護者に対する調査からみたプロジェクトの意義と課題

保護者の自由記述についてテキストマイニングにより分析した結果、事前調査では、「ドキドキワクワク」「臆する」「有りがたい」「取り組める」「やり遂げる」「信頼関係」等の単語が主に抽出された。この結果から、保護者は、本プロジェクトに対する期待や感謝、また参加児童・生徒に活動にしっかりと取り組むこと、やり遂げることを期待する様子が伺われた。緒言でも述べた通り、先行研究²⁾では、当事者（保護者）側のスポーツニーズは、勝ち負けというよりもスポーツ参加そのものにあると述べられていたが、本研究においても、参加そのものに意義を見出す保護者の考えが見て取れた。

事後調査では、「スキー」「ソリ」「ブランコ」「ささえる」「滑る」「体験」「貴重」「広げる」等の単語が主に抽出された。この結果から、事後調査は事前調査に比較し、具体的な活動に関する内容が抽出される傾向にあった。参加児童・生徒の具体的な活動の様子についての記述がいくつか見られたことから、知的障害児に対する支援者のよりいっそうの支援スキルの向上及び指導方法の獲得が期待されていると考えられる。しかし、時本・増田¹¹⁾は、「知的障害者スポーツにおいて具体的な指導上の留意点や指導方法が明確ではなく、その指導における特有の専門性がまだ曖昧である」点を指摘している。このような現状を踏まえ、今後のプロジェクトの在り方として、参加児童・生徒がスキー・雪遊びを楽しく取り組むことのできるよう、具体的な指導方法を確立す

ることで、より効果的な支援が可能となることが期待される。

3. 知的障害児に対するスポーツ活動支援の現状と本プロジェクトの意義と課題

わが国において、障害者スポーツが広まった契機は、1964年に日本で開催された東京パラリンピックである¹²⁾。その後、障害者スポーツは普及し、2011年8月に施行された「スポーツ基本法」の基本理念において、「スポーツは、障害者が自主的かつ積極的にスポーツを行うことができるよう、障害の種類及び程度に応じ必要な配慮をしつつ推進されなければならない」¹³⁾と明記された。障害者がスポーツ活動を行う意義について、藤田¹⁴⁾は、「障がい者の場合、より積極的に運動やスポーツを行わなければ生活の質（QOL）や日常生活動作（ADL）、健康や体力が維持できないことがある。この点で障がい者が運動やスポーツを実施することは障がいのない人よりも大きな意義を持つ場合がある。自立、自信、社会参加等についても同様である」と述べている。したがって、障害者の心身の健康増進及び社会参加等の観点から、障害者スポーツの推進が求められるといえる。特に本プロジェクトの対象は児童・生徒であり、少年期から青年期にかけての様々なスポーツ体験は、生涯スポーツとの出会いを推進する重要な機会のひとつと考えられる。

障害者のスポーツ実施について、スポーツ庁¹⁵⁾は、障害種別週1回の運動・スポーツ実施率を示している。2021年、成人の最も実施率の低い障害種は「肢体不自由（車椅子必要）」で24.1%、次いで「知的障害」で26.6%であった。一方、7～19歳の最も実施率の低い障害種は「肢体不自由（車椅子不要）」で25.0%、次いで「肢体不自由（車椅子必要）」で27.8%であった。なお、7～19歳における「知的障害」を抱えた者の運動・スポーツ実施率は51.0%であり、成人と異なる傾向にあることが示された。運動・スポーツ実施率が向上傾向にあるなか、特に「知的障害」を抱えた者が成人しても継続して行うことのできる生涯スポーツに出会うための支援策を講じていく必要があると考えられる。

ここで、現行の特別支援学校学習指導要領における体育科及び保健体育科の目標をみると、「生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力」¹⁶⁾の育成が目指されている。したがって、「継続してやりたいと感ずることが必要であり、そのようなモチベーションを育てることこそが学校教育の中の体育の役割である。しかし、現実の学校体育は、その役割を十分に果たしていない」¹⁷⁾。特に知的障害児を対象とする場合、体育授業における困難さが指摘されており¹⁸⁾、十分な支援が難しく、通常の体育授業で様々なスポーツ活動を経験するには限界があると考えられる。こうした現状がある中で、今回のプロジェクトは、参加児童・生徒に通常の体育授業では経験が困難なスキー・雪遊びを体験させることができたという点から意義のある活動であったと考える。今後継続していく上で、近年問題視されている教員の勤務時間や、コロナ禍という点を考慮しつつ、知的障害児のスポーツ活動支援の在り方について引き続き検討していく必要がある。

なお、今回のプロジェクトで着目したスキー・雪遊びといった活動に関連して、安井¹⁹⁾は、「知的障害者を含めて冬季のスポーツ・身体活動に関しての効果などについてはこれまでほとんど研究されてきていないのが現状である」と指摘している。この点について、改めて先行研究を概観したものの、近年においてもほとんど研究はなされていない。したがって、今回実施した知的障害児がなかなか経験することが困難であると考えられるスキー・雪遊び体験を実施していくことは、知的障害児の生涯スポーツの出会いの機会を増やすことができるのではないかと考える。ただし、本プロジェクトの参加者のスキー・雪遊び体験をみると、スキー・雪遊びともに経験が全くない参加児童・生徒は1名のみであった。今後、経験したことのない児童・生徒でも気軽に安心して参加できるよう、支援者の支援スキルや方法、人数といった支援体制を充実させていくことが検討課題である。

V. 本研究の限界と今後の課題

本研究はいくつかの限界を有する。まず、支援学生、保護者ともにサンプルが少ないため、今回の実施のみをもって、プロジェクトを評価することに限界がある。今回は第1回目のプロジェクトであるため、継続的に実施し、プロジェクトの振り返りと評価を行い、よりよい支援方法を探る必要がある。

次に、実際の参加児童・生徒からの回答による検討ができていない点である。可能であれば、参加児童・生徒を対象とした調査から、本プロジェクトの成果や課題を挙げるのが望ましいが、回答の困難さや負担が考えられることから、今回は支援学生と保護者の調査による検討とした。今後は、参加児童・生徒からの評価も可視化できるような試みも行っていきたい。

VI. 結論

①支援学生はスキー・雪遊び教室を通して、知的障害者に対する「否定的印象」の認知が低くなる結果が示された。

②保護者は、教室前は活動そのものに意義を見出すこと、教室後は具体的な支援に興味を示すことが示された。

③知的障害児に対する支援として、少年期から青年期にかけて生涯スポーツに出会うための支援策を講じていく必要があることが示された。今後、スキー・雪遊びとともに経験が全くない者も気軽に安心して参加できる支援体制を整えていく必要がある。

文献

- 金子勝司, 南條正人: 知的障害児(者)のスポーツ・レクリエーション活動と生活の質(QOL)に関する研究—性別による活動群と非活動群からの比較検討—, 岐阜協立大学論集, 23: 111-125, 2007.
- 田引俊和: 知的障害者のスポーツニーズと課題の検討—スペシャルオリンピックス参加者の保護者を対象とした調査分析—, 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要, (10): 73-78, 2017.

- 3) 公益財団法人日本パラスポーツ協会：かんたん！全国障害者スポーツ大会ガイド、http://parasports.or.jp/about/referenceroom_data/games-guide_03.pdf（参照日：2022年8月5日）。
- 4) 公益財団法人日本障がい者スポーツ協会：平成26年度国庫補助事業「重度障がい者スポーツ実態調査研究事業」報告書、<https://www.parasports.or.jp/promotion/data/%E5%B9%B3%E6%88%9026%E5%B9%B4%E5%BA%A6%E9%87%8D%E5%BA%A6%E9%9A%9C%E3%81%8C%E3%81%84%E8%80%85%E3%82%B9%E3%83%9D%E3%83%BC%E3%83%84%E5%AE%9F%E6%85%8B%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E7%A0%94%E7%A9%B6%E4%BA%8B%E6%A5%AD%E5%A0%B1%E5%91%8A%E6%9B%B8.pdf>（参照日：2022年8月5日）。
- 5) 中丸信吾，渡邊貴裕，渡正，他：教師からみた知的障害のある生徒における自然体験活動を取り入れた生活単元学習の学びのプロセス，*野外教育研究*，25：99-110，2022。
- 6) 中村友香，古谷勝則，赤坂信：東京都内の知的障害者更正施設における里山利用の実態，*千葉大学園芸学部学術報告*，(59)：39-45，2005。
- 7) 上原巖：知的障害者療育における野外活動の意義に関する考察，*環境教育*，9(2)：24-32，2000。
- 8) 社会福祉法人全国社会福祉協議会障害関係団体連絡協議会「地域での支え合いに関する研究」委員会：感染症拡大時における障害のある方の困りごと・解決方策の整理～地域での支え合いに関する研究～，<https://www.shakyo.or.jp/tsuite/jigyo/research/2021/220323shourenkyo/houkoku.pdf>（参照日：2022年8月7日）。
- 9) 松本耕二，田引俊和：障がい者スポーツをささえるボランティアからみた知的障がい者のイメージと日常生活における意識・態度，*山口県立大学学術情報*，(2)：27-38，2009。
- 10) 大山祐太：知的障害者のスポーツ活動における指導記録の記述に関する検討，*アダプテッド・スポーツ科学*，13(1)：11-22，2015。
- 11) 時本英知，増田貴人：障害者スポーツ指導者養成における知的障害に関する教育内容，*弘前大学大学院地域社会研究科年報*，17：17-32，2021。
- 12) 厚生労働省：政策レポート 障害者スポーツ，<https://www.mhlw.go.jp/seisaku/2011/01/01.html>，2011（参照日：2022年8月2日）。
- 13) 文部科学省：スポーツ基本法（平成23年法律第78号）（条文），https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kihonhou/attach/1307658.htm（参照日：2022年8月4日）。
- 14) 藤田紀昭：第3章障がい者スポーツの意義と理念，公益財団法人日本障がい者スポーツ協会編，*新版障がい者スポーツ指導教本*，ぎょうせい，2016。
- 15) スポーツ庁：令和3年度「障害者のスポーツ参加促進に関する調査研究」の調査結果について（速報値），https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/houdou/jsa_00101.html（参照日：2022年8月5日）。
- 16) 文部科学省：特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（小学部・中学部），https://www.mext.go.jp/content/20200407-mxt_tokubetu01-100002983_1.pdf（参照日：2022年9月12日）。
- 17) 橋本剛幸，永浜明子：児童生徒のアンケート分析からみた学校体育カリキュラムの研究—生涯スポーツにつながる授業を目指して—，*大阪教育大学紀要第V部門*，62(1)：79-93，2013。
- 18) 須田桂子，菅野和恵：特別支援学校（知的障害）小学部教師の体育授業における困難さの検討—小学部教師を対象に行った調査から—，*障害科学研究*，39：53-64，2015。
- 19) 安井友康：障害者の冬季身体活動に関する研究—障害者歩くスキー大会参加者の調査から—，*年報いわみざわ：初等教育・教師教育研究*，19：57-65，1998。